

高等教育研究センター かわらばん

秋号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニュースレター第16号

誰が学生の学習に責任を持つのか

人というのは、うまくいったときは自分の手柄にして、うまくいかなかったときは他人のせいにしてしまいがちです。大学における学習も然り。うまくいけば、学生は自分の努力の、そして教員は自らの良い指導の賜物だと思いき、うまくいかなければ相手が努力しなかったせいだと考えてしまふものなのです。

それでは一体、大学教育における学生の学習の責任は誰にあるのでしょうか。これは「見単純そうに見えて、実は大学教育を考える際の重要な

問いです。ここでは、私の個人的な考えをぶつけて問題提起をしてみたいと思います。

ではならないとも言えるでしょう。一方、学生を教える教員に責任があると思える者もいることでしょうか。あると答える者もいることでしょうか。大学として学生を入学させたのだから、教員が責任をもってしっかり知識や能力を身につけて卒業させるべきだと。現在、日本の各大学で実施されているファカルティ・デベロップメントも、学生の学習の責任は教員にあるという考えのもとで実施されている場合も少なくないと思われ

学生か教員かという議論

ある者は、学習の責任は学生にあると答えることでしょうか。大学は学ぶ意欲をもった大人が集まる高等教育機関であるから、学生が自分の学習に責任をもたなければならぬ。また、大学のカリキュラムは自由な選択できる科目も多いため、自らの学習に関して責任をもって計画しなく

す。

未来の大学教員を育てる! ～「院生のための大学教授法研修会」を開催～

高等教育研究センターでは名古屋大学の大学院生を対象とした大学教授法研修会を9月29日のランチタイムに開催しました(於:文系総合館7階オープンホール)。教育、経済、国際言文、国際開発、情報、環境、工の7研究科から17名の院生が参加し、スナックやドリンクをつまみながら、活発な意見交換を行いました。

研究大学の大学院生は近い将来、大学教員になる可能性が高いにもかかわらず、日本ではこれまで組織的な教授法研修はほとんど行われてきませんでした。いくつかの大学で実施されているティーチングアシスタント研修は補助的業務の講習に限定されています。そこで今回は、大学教員に求められる教授法の基本について2つのセッションを提供しました。最初に「授業の導入の実践ノウハウを学ぼう」(夏目達也教授)続いて「学生を授業に参加させるための教授法」(中井俊樹助教授)について、基本概念や具体的なノウハウを紹介しました。

次回は11月15日(水)12時に同オープンホールで開催予定です。来年度の授業に向けて、シラバスの作成方法を特集します。2回続けて出席した大学院生には修了証をお渡しします。(近田政博)



責任は大学のすべての構成員に
大学生の学習の責任が、学生にあるのか、教員にあるのか、それとも両方にあるのかという枠組みで議論を進めると、大事な視点を失う可能性があることをここで指摘しておきたいと思えます。私は、大学生の学習には、実に多くの者が関わっていると見たほうがよいと考えています。例えば「大学は単位だけ揃えて卒業すればいい」とアドバイスする上級生が多数いたとしたら、彼らは学生の学習に確実に影響を与えていると思いませんか。

大学時代の学習は単に教室にとどまるものではありません。教育を真面目に考えれば、教室内の学習だけを通じて、大学教育の目的が成就されるとは考えられないのです。たとえば、目的意識や価値観といった広く人間的な発達などは、教室外の活動によって促進されます。さらに、学生は、意識しているかどうかに関わらず、学内にいる大人たちの行動から影響を受けているものです。忘れがちなことですが、人は知らず知らず他人のロールモデルになっているのです。身近な大人の教養ある振る舞いは、きつと学生の模範となることでしょうか。このように考えると、大学生の学習の責任は、その責任の範囲は異なるものの、学生集団も含めた大学のすべての構成員にあると言

学習の質向上のための総合的アプローチ

教育活動というのは基本的に協働的な営みであり、大学のすべての構成員は学生の学習に対して責任の一端を担っていると考えられます。

基本的には誰もが広い意味での教育者なのです。大学生の学習の質を向上させるには、すべての構成員による総合的なアプローチが有効です。実際に教室で教えるほかに、教育目標を設定する、オリエンテーションを担当する、時間割を作成する、教育環境を整備する、図書を管理するなど、さまざまに関与することができ

ます。

それぞれの構成員は、自らの立場にあつて学生の学習に対して何ができるのかを、考えてゆく必要があります。それらの取り組みが学生の学習という共通の目標に向かって相互に補完しあうものになったとき、大学教育の質は大きく向上することでしょう。そのためには大学のすべての構成員が、学生の学習に関する目標と責任を共有する、という意識を持つて、コミュニティを再構成してゆく必要があります。

以上、私なりの考えを書いてきましたが、私自身は教員として、また教育研究者としても、学生の学習に関わっています。教育研究者には、学生の学習や発達に関する知見を現場に応用することが求められており、この責任も自覚しなくてはならないと感じています。

(中井俊樹)



本学で『宇宙100の謎』というオンラインによるQ&Aのプロジェクトが始まったのをご存知でしょうか。このところ、大学や公的研究機関によるオンライン科学Q&Aのウェブサイトをちょくちょく見かけるようになりました。ルイ・パスツール大学(フランス)によるScience-Citoyen(「科学一市民」)は、その先駆的存在といえるでしょう。「遺伝子組換え食物」「電磁波の影響」「ナノテクノロジー」などの社会的関心の高い話題をたてて質問を受け付け、回答はその話題を専門とする教授が行っています。回答は1つだけのこともあれば、署名入りでいくつか掲載されることもあります。このウェブサイトの運営は、学長直属の組織で、市民の科学技術的精神風土(“scientific and technological culture”)を涵

オンライン科学Q&A

養することをめざしている部署に委ねられています。この部署では、大学の博物館運営や、カフェシアンティフィーク、公開講座といったイベントなど、大学と社会をつなぐ様々な取り組みを行っていて、Science-Citoyenもそのなかに位置づけられています。フランス国内のみならず、カナダやニューカレドニアなどの遠く離れたフランス語圏からもアクセスがあるというのも、オンラインQ&Aならではです。

この秋、あなたも素朴な質問を考えてみませんか? それとも回答にトライしてみますか?
(齋藤芳子)

宇宙100の謎 <http://www.a.phys.nagoya-u.ac.jp/100nazo/>
Science-Citoyen <http://science-citoyen.u-strasbg.fr/>

Curriculum Glossary

カリキュラムにまつわる用語集

成績評価点平均値 (Grade Point Average: GPA)

厳格な成績評価や単位の実質化をどう実現するか、という問題を最近よく目や耳にします。その方法をめぐって、各大学で活発な議論が展開されています。米国を中心に普及しているGPAは、学生の学修の到達度を明確にし、自らの学習設計を主体的に描かせ、意欲的な学習活動を促進することを目的とした成績評価方法です。具体的には、5段階(A・B・C・D・F)の成績評価をもとに、1単位あたりの成績評価点の平均値を算出します。一般的には、各科目の成績評価について、Aを4ポイント、Bを3ポイント、Cを2ポイント、Dを1ポイント、Fを0ポイントと換算し、以下の計算式が用いられます。

$$GPA = \{ (科目X_1のポイント \times 単位数) + (科目X_2の \dots) + \dots \} / 全科目の総単位数$$

日本でもすでにGPA制度を採用している大学の事例があります。たとえば、北海道大学では「秀・優・良・可・不可」の5段階の成績評価にもとづくGPA制度が導入されています。

また、米国の大学では、学生が奨学金を獲得するための基準として学期(セメスター)ごとのGPAを採用している事例が多くみられます。自らの学生生活を継続する上で、高いGPAを維持できるかどうかは、学生にとってもきわめて大きな関心事となっています。

従来、4段階評価(優・良・可・不可)が一般的であった日本の大学から、外国の大学への留学や大学院への進学を申請する際は、成績評価の読み替え等が必要となり、学生の送り手、受け手の大学双方に煩雑な作業が生じていました。名古屋大学では、毎年約1,200名の留学生在籍し、なおかつ多くの交換留学生等を輩出しています。GPAを導入することにより、大学教育の国際化が促進される条件のひとつが整うといえるでしょう。研究だけでなく教育の国際水準も視野に入れて活動している基幹大学として、名古屋大学でのGPAの導入の是非も含め、成績評価方法の検討は急がれる課題のひとつなの

(鳥居朋子)

『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』をウェブ化しました!

高等教育研究センターでは、このたび『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』をウェブ化しました。

これまで第1号『学識ある市民』をめぐって(31ページ)と第2号『自発的に学ぼう』(73ページ)の2冊をハンドブック形式で提供してきましたが、これからは手元に冊子がなくてもオンラインで閲覧頂けます。ウェブ版では48個の実践ティップスやコラムをリスト化しましたので、興味を持った箇所から読むことができます。また、ご意見・ご感想を高等教育研究センターに直接メールで送信していただけます。

「大学で学ぶことの意味を新入生に伝えること」は大学教職員にとって最も重要な仕事の一つです。もし、基礎セミナーなどの初年次教育を担当される機会がありましたら、このスタディティップスをぜひご覧下さい。そして改善のためのアイデアをお聞かせ下さい。(近田政博)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/>



必要な仕事の一つです。もし、基礎セミナーなどの初年次教育を担当される機会がありましたら、このスタディティップスをぜひご覧下さい。そして改善のためのアイデアをお聞かせ下さい。(近田政博)

ミシガン大学新任教員研修の

その正体は?

本年8月30日、機会があつてミシガン大学アナーバー校で開催された新任教員オリエンテーションを見学してきました。早朝9時、オリエンテーションは約200人の新任教員を対象に、学生会館(ミシガン・リーグ)で始まり、豊富なドリンクやスナックが参加者を迎えてくれました。次に、隣接する劇場に移動して演劇プログラムを鑑賞しました。この演劇プログラムは授業空間で起こりうる各種トラブルの事例を30分ほどのドラマで表現し、教員の授業に対する関心を高める効果があります。

次に、3つの分科会(授業のベストプラクティス、教育テクノロジー、授

業で起こる問題点に分かれて、具体的な問題を少人数で議論しました。白眉は、最後に行われたインフォメーション・フェアと昼食会です。ミシガン大学の学習・教育サービスに携わる47の組織が大ホールでポスターセッションを行い、分科会から帰ってきた新任教員を迎えます。それから200人の盛大な昼食会が始まり、学長が歓迎スピーチを行います。

痛感したのは、このオリエンテーションは研修というよりも、新任教員を大歓迎するための催しだということとです。多大な労力と心のこもったものでなしを受けたら、誰でも悪い気はしないでしょう。ひるがえって、わが名古屋大学はどうでしょうか?

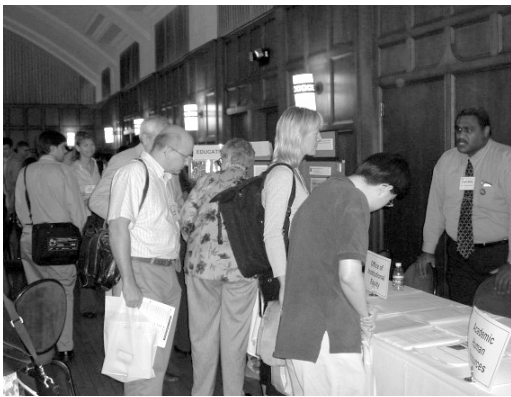
(近田政博)

ポスター発表募集中!

大学教育改革フォーラムin東海2007

日時:2007年3月10日(土)
場所:名古屋大学IB電子情報館
主催:名古屋大学高等教育研究センター

お問い合わせ・お申込みは
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
TEL 052-789-5696



インフォメーション・フェアの様子

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

ウルリッヒ・タイヒラー著 馬越徹・吉川由美子監訳

『ヨーロッパの高等教育改革』

玉川大学出版部 2006年

本書は、高等教育研究者としてわが国でも有名なタイヒラー教授(ドイツ・カッセル大学教授)の近著である。本書には著者の豊かな学識に支えられた深い洞察と多くの知見が盛り込まれている。その魅力を大胆に一言でいえば、高等教育のモデルはアメリカの大学だけではない、わが国の高等教育のあり方を検討する上でヨーロッパの制度や改革動向から学ぶことは多いという、ごく当然ではあるが、きわめて重要なことを実感させてくれることであろうか。

たしかにアメリカの大学は研究・教育の両面にわたる成功モデルとして世界的に認知されているが、ヨーロッパの

高等教育ももっと参考にされてよい。ヨーロッパの高等教育制度はきわめて多様であるが、2010年のヨーロッパ高等教育教育・研究圏の創設に向けて「収斂」=緩やかな統一を進めていること、わが国にも共通する諸課題に対して独自のアプローチを試みていることなど、興味はつきない。

本書の特徴として、上記の点以外にも以下のような点をあげることができる。

・ヨーロッパ諸国の高等教育をめぐる複雑な事情や改革の動向を丁寧に紹介している。とくに、ヨーロッパ圏内外の学生移動の問題、学位の相互認証、入学者選抜、高等教育と

雇用の関係など多様な問題を扱っている。

・ドイツ、イギリス、フランスの大国だけでなく、オランダ、スウェーデン、フィンランド等の小規模国家における高等教育政策なども取り上げている。

・しばしば、日本やアメリカとの対比でヨーロッパ諸国の高等教育の特徴が語られており、日本の読者にとって欧米の高等教育の理解を助けている。

・欧米の事情に通じているだけでなく、ヨーロッパで数少ない日本通である著者の強みが随所に遺憾なく発揮されている。一例をあげると、「ヨーロッパの観点からみると、アメリカや日本の大学にはあまりにも格差があつて、その落差も激しいのに、それを当然と見なしすぎる」(49頁)という指摘は鋭く、興味深い。

なお、日本語訳は全体にこなれていて、きわめて読みやすい。そのことも、本書の魅力を深めているように思われる。

(夏目達也)

高等教育研究センタースタッフ(2006年11月現在)

センター長 戸田山 和久
専門領域: 科学技術社会論
教授 夏目 達也
専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論
助教授 近田 政博
専門領域: 比較高等教育学、初年次教育
助教授 中井 俊樹
専門領域: 大学教授法、高等教育マネジメント

助教授 鳥居 朋子
専門領域: 高等教育カリキュラム論、教育経営学
助手 齋藤 芳子
専門領域: 科学技術と高等教育、科学技術社会論
専任職員 井上 和美
事務室連絡先: 052-789-5696

ホームページ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

<外国人客員教授>

ジェラルド・フライ (2006年10月~2007年3月)
ミネソタ大学教育人間発達学部教授(アメリカ合衆国)

<平成18年度 国内客員教授>

馬越 徹 桜美林大学 大学教育研究所 所長
小笠原 正明 東京農工大学 大学教育センター 教授
吉田 文 独立行政法人メディア教育開発センター 教授